

(様式1)

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

平成29年度委託事業完了報告書【総括】

都道府県名	和歌山県	番号	30
-------	------	----	----

推進地区名	協力校名	児童生徒数
美浜町	美浜町立松洋中学校	171

○ 実践研究の内容

1. 推進地域における取組

(1) 推進地域全体への取組

平成28年度全国学力・学習状況調査において、各教科の平均正答率は、中学校数学Aを除き全国平均を下回った。国語科については、平成19年度の調査開始以来、小中学校ともに全国平均と差がある。児童生徒質問紙調査では、「和歌山の授業づくり 基礎・基本 3か条」を中心とした授業改善を進めた結果、「めあて」「ふり返り」についての質問項目では改善が進んでいるが、国語科と家庭学習についての質問項目で、肯定的な回答の割合が低く課題が大きい。これらの課題を改善するため、平成28年度と平成29年度は、次の①～④の4つの施策を中心に、学力向上推進を図った。

①基礎学力の定着

○「国語・理科マスター問題集」を活用し、学力の定着を図る。

教科書に対応し、授業と予習・復習に活用できる問題集を作成し、これを授業・家庭学習・補充学習で効果的に活用し、確実な学力定着を図った。

○県学習到達度調査を活用し、基礎学力の向上を図る。

基礎的・基本的な学力の定着状況を把握し、授業改善や個に応じた指導に生かした。また、各学校において、分析結果を活用して課題の発見と改善を図るよう指導した。

○課題のある学校に退職教員を派遣し、学力の定着を図る。

優れた教育実践力を持つ退職教員を、学力定着に課題を抱える小中学校（約70校）に派遣し、学校の取組や教員の授業づくりを支援した。

②思考力・表現力を高めるための授業改善

○「授業事例集（DVD）」を活用し、授業改善を進める。

教員の授業力を向上させるため、主体的・協働的な学びの実現をめざした授業づくりの指導用映像資料（平成28年度：国語、平成29年度：理科）を作成した。これを様々な研修で活用し、授業改善を図った。

○「学力向上コアティーチャー」を養成し、学校・地域のリーダーとして授業改善を進める。

県内各地方で中核となる教員16名を、秋田県に1週間派遣し、研修内容を所属校で実践するとともに、研修成果を地方別研修等において普及した。

③補充学習の強化と家庭学習の定着

○補充学習プログラムを提供し、学力の定着を図る。

放課後だけでなく長期休業等を利用した補充学習を実施することで、学習のつまづきをなくし、児童生徒の確実な学力定着を図った。

○「家庭学習の手引き」を活用し、家庭学習の習慣化を図る。

学校が作成した「家庭学習の手引き」を効果的に活用し、平日や休日に予習・復習するなどの学習習慣の確立を図った。

④学力向上のための戦略的な学校経営

○「スクールプラン」「学力向上推進プラン」の作成と実行を推進する。

全ての学校において、学校教育目標の実現に向けた学校経営方針をまとめた「スクールプラン」の作成及び実行を推進するとともに、教員研修等を通じて、自校の課題及び改善策等をまとめた「学力向上推進プラン」（平成27年度より毎年作成）について、学力向上に効果的に運用できるよう指導した。

(2) 推進地区や協力校に対する指導・支援

①和歌山県学力向上推進検討会での指導

学識経験者、学校教育関係者、社会教育関係者、PTA関係者を検討員とする学力向上推進検討会を設置し、協力校と連携校を含む推進地区全体に対し、授業参観や生徒の実態等から見える課題に対し広く意見を聴取し、具体的な指導方法等についての指導助言を行った。

②推進地区・協力校への学校指導訪問

県と町がチームを組み、協力校や連携する小学校2校へ、定期的な学校指導訪問を行った。授業参観後の研究協議においては、「和歌山の授業づくり 基礎・基本 3か条」に沿った授業構成についての指導や、協力校が重点的に進めている取組についての指導助言を行った。

③退職教員の派遣

協力校や連携する小学校に優れた教育実践力を持つ退職教員を派遣し、若手教員等を対象に教科指導を行った。また、派遣校を訪問し、退職教員の指導を支援した。

④学級集団づくりに対する指導・支援

協力校や連携する小学校において、道徳の教科化に向けての準備や道徳教育の充実について指導した。また、協力校において、生徒を対象にグループアプローチの手法を用いて良好な集団づくりについて指導するとともに、教員を対象に学級集団づくりに関する研修を行った。

⑤中堅教員の育成を図るミドルリーダー研修会の実施

推進地区を含む日高地方において、中堅教員の教科指導や学校運営に係る指導を行い、各学校における授業改善や組織的な学校運営を進めた。

2. 推進地区における取組

(1)「学力向上推進プラン」を活用した学力向上に係る検証改善サイクルの取組の支援

①授業力向上に向けた支援

○授業研究会

平成29年10月27日（金）に松洋中学校にて美浜町学力向上授業研究会を実施し、美浜町内の小中学校の全員の教員が出席した。

○校内研修会等への指導主事の複数回派遣

協力校を中心に町内各校へ派遣し、授業参観や研究協議を通して継続的に支援を行った。校内研修では、和歌山県教育センター学びの丘が実施している支援事業を積極的に活用し、研修を行った。

○外部講師招聘による研修

協力校においては大和大学教育学部教育学科舟橋秀晃准教授を招聘し、研修を複数回にわたり行った。町全体の研修としては、8月21日（月）に和歌山県教育庁学校教育局義務教育課幼児教育推進班辻民子特任指導主事を迎え、「就学前からの円滑な指導の在り方について」と題して講演会を開催した。

②全国学力・学習状況調査結果の活用

町教育委員会にて分析した町内全体の分析結果を示した上で、各校それぞれの分析を行い学力向上に向けての取組を進めていくように助言を行った。取組の推進に当たっては、各校の取組状況を授業参観および協議にて確認し、児童生徒の学力向上に向けての指導を行った。

③和歌山県学習到達度調査の活用

全国学力・学習状況調査後の授業改善の成果を、和歌山県学習到達度調査結果により検証し、成果のあった取組について推進地区全体に広めるとともに、課題については推進地区全体で改善策の検討を進めるなど、取組の支援および推進地区全体の学力向上を図った。

④「hyper-QU」の活用

「hyper-QU」を実施し、生徒の学級満足度および学校生活意欲の分析結果を、生徒一人一人の状況と学級集団意識の把握に生かし、生徒へのきめ細かい指導や支援を行うことにより生徒の学習意欲向上につなげるよう指導を行った。

(2) 小中連携推進委員会の設置

①中学校での学習ルールの統一

校長会および小中連携推進委員会において各校児童生徒の状況を情報共有し、学習規律や授業づくりについて共通のルールを設定した。この取組により、小中学校間および2小学校間の学習指導面の格差解消を図った。

②教科指導についての小中連携

○小中の互見授業

推進地区共通の課題について早期発見し、小・中学校が共通に取り組むことによって解決につながるよう、小中での互見授業を実施した。互見授業における各教員からの報告内容は、校長会、小中連携推進委員会、各校現職教育等で活用した。

○学力向上の取組についての情報共有

「和歌山の授業づくり 基礎・基本 3か条」の実践状況、授業の基本方針としての「教えて考えさせる」指導、板書構成、発問の在り方、正確に答える習慣を身に付ける指導、補充学習および家庭学習の実施状況等について情報を共有した。推進地区の課題である、活用問題に対応する力を向上させるための方策について協議した。

○放課後学習支援員を活用した補充学習の充実による基礎的・基本的な知識・技能の定着

退職教員等を活用して補充学習支援を行い、基礎的・基本的な学習内容の確実な定着を図るようになった。

3. 協力校における取組

(1) 全国学力・学習状況調査や和歌山県学習到達度調査の結果を踏まえた授業改善や指導の充実

生徒に授業の見通しを持たせ、思考を促し、理解を深めるための構造化された板書について研究した。また、その板書を生徒のノートづくりに生かすことにも取り組んだ。気付き等をメモとして記す習慣を生徒に身につけさせることで、自分の考えをノートにまとめたり、文章を要約して要旨を捉えたりする力の育成を図った。

「和歌山の授業づくり 基礎・基本 3か条」を踏まえた授業づくりと評価を実践するとともに、年6回の校内授業研究会を充実させること、先進校調査研修において情報収集を行うことで、生徒の主体的な学びや思考力・判断力・表現力を高めるための授業改善、教員の指導力向上につなげた。

(2) 「hyper-QU」の活用

年間2回、「hyper-QU」を実施することで、生徒一人一人の状況と学級集団の状態、学習意欲の変容を把握し、結果を生かしたきめ細かな指導や支援を行った。

(3) 小中連携による学力向上

①小学校での出前授業による授業改善

小学校での中学校教員による出前授業を推進した。中学校の教員による教科の専門性を生かし

た授業を行うことで、それぞれの教科の学習内容の系統性を大切にした授業づくりを意識することにつながった。児童生徒にとっては、学習活動における小学校から中学校への円滑な接続につながった。

②小中互見授業の推進による授業改善

推進地区において、小中互見授業を推進した。小中学校それぞれの教員が児童生徒の様子、授業の展開等を見取り、9年間の児童生徒の成長を見通して授業改善、授業づくりを行うことにつながった。

③共通に取り組む内容の選択

学力向上に関わる小中学校共通の課題の中から、チャイム行動や本読みカードなど具体的な内容を選択し、小学校と連携して実践した。

(4) 家庭学習の習慣化と質問教室・補充教室による学習意欲及び基礎学力の向上

協力校で作成した「家庭学習の手引き」を基に、家庭学習の習慣化を図るための指導を徹底した。家庭学習については、各教科の家庭学習の内容と授業との関係を見直し、特に、週末の主体的な家庭学習を推進した。家庭学習に合わせて、日課を大切にした基本的な生活習慣を身に付けさせる指導も徹底した。

放課後には質問教室を実施し、昼休憩にも、教科担当による小テストや再テストを実施した。また、地域の人材を活用し、計画的な放課後の補充学習を8月から2月末まで各学年で実施した。長期休業中についても、計画的に補充学習を実施した。

○ 実践研究の成果

1. 協力校における取組の成果

「和歌山の授業づくり 基礎・基本 3か条」に基づいた授業実践を推進し、「本時のめあて」を明確に板書することが、全教員全授業において実践されるようになった。「考えを書く時間の確保」については、意識した授業構成を進めている段階であり、概ねできている状況である。「ふり返りの時間の確保」は、ほとんどの授業で実施できていない状況から、徐々に実施されつつある状況へと変化してきている。全国学力・学習状況調査結果からも、授業に対する教員の意識の変化が確認できる(表1)。

表1 「全国学力・学習状況調査 生徒質問紙調査」について肯定的な回答をした児童生徒の割合

「1, 2年生のときに受けた授業の中で目標(めあて・ねらい)が示されていたと思いますか」			
	H28 (%)	H29 (%)	H29-H28 (pt)
松洋中学校	91.8	98.1	6.3
県	85.9	89.7	3.8
全国	84.9	87.8	2.9

「1, 2年生のときに受けた授業で扱うノートには、学習の目標(めあて・ねらい)とまとめを書いていたと思いますか」			
	H28 (%)	H29 (%)	H29-H28 (pt)
松洋中学校	73.4	98.0	24.6
県	76.0	82.3	6.3
全国	76.8	80.3	3.5

「1, 2年生のときに受けた授業の最後に学習内容を振り返る活動をよく行っていたと思いますか」			
	H28 (%)	H29 (%)	H29-H28 (pt)
松洋中学校	57.2	78.4	21.2
県	59.1	65.2	6.1
全国	63.1	66.1	3.0

これまでプリント学習が中心の授業であったが、生徒が書きながら考えて思考を深めたり、学習の流れや本時で学んだことを自らが振り返ったりできるよう、授業でのノートづくりの研究に取り組んだ。また、ノートづくりにつながるよう、構造化された板書となるよう工夫を重ねている。結果、生徒のノートは、徐々に質が向上してきている。

外部指導者を招聘して「hyper-QU」のデータ活用方法について研修を受けることで、学級全体の状態、学級内での生徒一人一人の状態をデータに基づいて効果的に把握することができた。また、生徒の普段の行動面と心情面とのずれに対する理解や支援のポイントについての協議も、定期的に行った。意識的な学級づくりを行うことで、落ち着いて学校生活を送れ、学習に取り組めるよりよい学習集団をつくることができています。

小中の互見授業での気付きや小中連携推進委員会での協議内容をもとに、小中学校が共通して取り組む方策を設定する等、具体的な実践へとつながっている。また、学力定着に効果的な授業形態や指導方法について、9年間を見通した協議を行うことができた。

家庭学習については、家庭学習に対する意識が教員、生徒共に向上し、効果的な家庭学習について生徒自らが考え、その方法を自分たちの学習に取り入れるなど、家庭学習に対する主体的な態度が生徒に身に付きつつある。各学年単位で取り組みを進めてきた家庭学習については、今後、2年生で行っている「家スタ」という取組を全校で進めていく予定である。担任が生徒一人一人の生活習慣を把握したり、自主的な学習習慣を定着させたりするための方策を取り入れた取組を進め、家庭学習の一層の充実を図っていく。

補充学習の取組では、地域人材の協力で定期的な補充学習を実施することができ、基礎的・基本的な学習内容の確実な定着につながった。

2. 実践研究全体の成果

本県の「学力向上対策中期計画」と「平成29年度学力向上対策」に基づき、県内全ての小中学校で、数値目標や具体策を盛り込んだ「学力向上推進プラン」を作成し、検証改善サイクル確立に向けて具体的な取組を実行している。その結果、学力向上に向けての取組の方向性が明確化し、学校内で組織的な取組の推進につながっている。また、学力調査等の結果を指標として位置付けることにより、取組状況の確認、修正、改善策の実行等、実効性のある取組につながっている。

授業改善については、県教育委員会と市町村教育委員会が、各学校の取組状況を確認し、「和歌山の授業づくり 基礎・基本 3か条」を踏まえた授業づくりに向けて、指導案検討や授業参観、参観後の協議を通して継続的に指導・支援を行った。授業における「見通し・言語活動・振り返り」活動は定着しつつあり、付けたい力を確実に育成するための授業づくりへの意識が高まってきている。また、板書や発問の質も向上してきており、教師主導の一斉授業から児童生徒が主体となって協働的に学び、思考する授業へと移行してきている。

県作成の「国語・理科マスター問題集」は授業や家庭学習、補充学習で取り入れやすく、児童生徒の基礎的・基本的な内容の確実な定着を図る場面、読む力と書く力を育成する場面など、様々な場面で活用されている。また、補充学習プログラムの提供は、放課後だけでなく長期休業等を利用した補充学習の計画的な実施につながり、児童生徒の学習のつまづきを早期に見つけ、支援することで確実に学力を定着させることができた。

大量退職によって若手教員が増える中、優れた教育実践力を持つ退職教員を、学力定着に課題を抱える学校に派遣することで、学校の取組の見直しや教員の授業力の向上を図ることができ、教員の学ぶ意欲の向上にもつなげることができた。

これらの取組の結果、平成29年度全国学力・学習状況調査の教科に関する調査において、児童生徒の平均正答率は概ね全国平均と同程度となった(表1)。また、児童生徒質問紙調査において、これまで肯定的な回答の割合が低く、課題の大きかった国語に関する質問項目において、徐々にではあるが肯定的な回答の割合が増加し、改善傾向にある。(表2)。

表 1 全国学力・学習状況調査 教科に関する調査結果

教科	小国 A		小国 B		小算 A		小算 B	
	H28	H29	H28	H29	H28	H29	H28	H29
年度								
県平均正答率 (%)	70	75	56	57	77	79	46	46
全国平均正答率 (%)	73	75	58	58	78	79	47	46
差 (pt)	-3	0	-2	-1	-1	0	-1	0
教科	中国 A		中国 B		中数 A		中数 B	
	H28	H29	H28	H29	H28	H29	H28	H29
年度								
県平均正答率 (%)	74	77	63	70	62	65	43	48
全国平均正答率 (%)	76	77	67	72	62	65	44	48
差 (pt)	-2	0	-4	-2	0	0	-1	0

表 2 全国学力・学習状況調査 児童生徒質問紙に関する調査結果

「国語の授業で目的に応じて資料を読み、自分の考えを話したり、書いたりしていますか」について、肯定的な回答をした児童生徒の割合								
	小学校				中学校			
	H28		H29		H28		H29	
県 (%)	61.7		66.3		52.9		55.2	
全国 (%)	67.0		68.0		62.2		62.7	
差 (pt)	-5.3		-1.7		-9.3		-7.5	
「授業の内容はよく分かりますか」について、肯定的な回答をした児童生徒の割合								
	小学校				中学校			
	H28国語	H29国語	H28算数	H29算数	H28国語	H29国語	H28数学	H29数学
県 (%)	81.2	83.3	82.6	83.2	72.7	73.9	69.8	72.8
全国 (%)	80.7	82.2	80.2	80.6	74.1	74.9	69.4	69.4
差 (pt)	0.5	1.1	2.4	2.6	-1.4	-1.0	0.4	3.4

3. 取組の成果の普及

本研究の成果発表会を平成29年10月27日（金）に開催し、研究内容を具現化した授業となるよう指導助言を行うとともに、2年間の取組について県内外の学校に広く普及した。また、県内の学力担当教員等を対象にした研修会や、県内6地方で開催した「授業づくり研究会」等において、本事業の成果を生かした学力向上に効果的な取組等について普及した。今後は、市町村教育委員会指導事務担当者等会議において、成果の普及を図る予定である。

○ 今後の課題

授業改善が進みつつあるが、学校や教員によって、その姿勢には差も見られる。学校指導訪問を継続し、「和歌山の授業づくり 基礎・基本 3か条」を踏まえた授業づくりを一層充実させ、思考力・判断力・表現力の育成につながる授業づくりについて指導・支援を行う。また、校内の研究体制や補充学習の指導体制についても、県内外で学力向上に成果を上げている学校の実践を取り入れ、引き続き指導する。

家庭学習については、平成29年度全国学力・学習状況調査の質問紙調査結果において、改善傾向にはあるが、特に中学校においては依然として全国との差は大きくなっている。今後は、「国語・理科マスター問題集」の積極的な活用を促し、各学校で作成している「家庭学習の手引き」について、より具体的で統一感のある、家庭で活用されやすい形式に改訂できるよう、県外派遣した教員が作成した家庭学習の参考事例を提供する。

また各種研修会の充実を図り、国や県の施策等を効果的に活用しながら、ミドルリーダーとなる中堅教員を育成していくことで、職場の同僚性や協働性を高め、管理職のリーダーシップのもと、全教職員が当事者意識を持って組織的に学校運営にかかわるように働きかけていきたい。

(様式2)

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の
重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

平成29年度委託事業完了報告書

【推進地区】

都道府県名	和歌山県	番号	30
-------	------	----	----

推進地区名	美浜町
-------	-----

○ 推進地区として実施した取組内容

1. 研究課題

- (1) 「学力向上推進プラン」を活用した学力向上に係る検証改善サイクルの取組の支援
- (2) 小中互見授業の推進による授業改善
- (3) 放課後学習支援員を活用した補充学習の充実による基礎的・基本的な知識・技能の定着

2. 研究課題への取組状況

- (1) 「学力向上推進プラン」を活用した学力向上に係る検証改善サイクルの取組の支援

①授業力向上に向けた支援

○授業研究会ならびに校内研修会等への指導主事の複数回派遣

「和歌山の授業づくり 基礎・基本 3か条」の一層の充実を図り、主体的な学び、対話的な学び、深い学びを通して思考力、判断力、表現力を育成することを目途に以下のとおり学校への支援を行った。

まず、授業研究会については、平成29年10月27日（金）に松洋中学校にて美浜町学力向上授業研究会を実施し、小中学校のほぼ全ての教員が出席した。研究授業は第1学年（外国語科）、第2学年（学級活動）、第3学年（国語科）、特別支援学級（数学科）で行った。松洋中学校の研究主題である「ふれあいを大切にし、はじめを重んじる生徒指導並びに学習指導の充実～思考力・判断力・表現力の育成～」に沿った授業および研究協議を行った。また、「9年の学びの先にあるもの～これからの学校学習～」と題して大和大学教育学部舟橋秀晃准教授による深い学びをめざす取組の方向性についての講演を行った。

次に、校内研修会への支援については、協力校を中心に町内各校へ訪問を行い、授業参観や研究協議を通して継続的に支援を行った。また、校内研修では、和歌山県教育センター学びの丘が実施している支援事業を積極的に活用し、指導案検討、授業公開、研究授業、研究協議を通じた研修を行った。

○外部講師招聘による研修

推進地区全体における教員の授業力向上を図ることを目途に、外部講師招聘を行った。

まず、協力校である松洋中学校においては和和大学教育学部教育学科舟橋秀晃准教授を招聘し、公開授業、研究授業および研究協議、講義等を通じた研修を複数回にわたり行った。

また、町全体の研修としては、8月21日（月）に和歌山県教育庁学校教育局義務教育課幼児教育推進班辻民子特任指導主事を迎え、「就学前からの円滑な指導の在り方について」と題して講演会を開催した。

②全国学力・学習状況調査結果の活用（資料1）

全国学力・学習状況調査の分析結果から、児童生徒の学力課題を把握し、課題に対する具体的な取組を早期に実行できるようにした。

まず、町教育委員会にて分析した町内全体の分析結果を示した上で、各校それぞれの分析を行い学力向上に向けての取組を進めていくように助言を行った。

次に、取組の推進に当たっては定期的な学校訪問に加え、必要に応じ適宜学校訪問を行い、各校の取組状況を授業参観および協議にて確認し、児童生徒の学力向上に向けての指導を行った。

小学校	国語A	国語B	算数A	算数B	中学校	国語A	国語B	数学A	数学B
美浜町	73	58	79	40	美浜町	72	61	58	39
国	74.8	57.5	78.6	45.9	国	77.4	72.2	64.6	48.1
差	-1.8	0.5	0.4	-5.9	差	-5.4	-11.2	-6.6	-9.1

資料1 平成29年度全国学力・学習状況調査結果（平均正答率%）

③和歌山県学習到達度調査の活用

全国学力・学習状況調査後の授業改善の成果を、10月18日（水）実施の和歌山県学習到達度調査結果により検証し、成果のあった取組について推進地区全体に広めるとともに、課題については推進地区全体で改善策の検討を進めるなど、取組の支援および推進地区全体の学力向上を図った。

④「hyper-QU」の活用

協力校である松洋中学校において、「hyper-QU」を実施した。生徒の学級満足度および学校生活意欲の分析結果を、生徒一人一人の状況と学級集団意識の把握に生かし、生徒へのきめ細かい指導や支援を行うことにより生徒の学習意欲向上につなげるよう指導を行った。

（2）小中互見授業の推進による授業改善

小中互見授業の取組を継続させるとともに、「小中連携推進委員会」にて検討した推進地区での成果や課題等をもとに、9年間の系統性を重視した独自の学力定着に効果的な授業形態や指導方法について協議を行った。

①中学校での学習ルールの一

校長会および小中連携委員会では各校児童生徒の状況を情報共有し、学力向上に努めている。本年度も、学習規律の基盤として授業はチャイムで始まりチャイムで終わるなど適切なチャイム行動を徹底していくこと、「和歌山の授業づくり 基礎・基本 3か条」を徹底し、授業展開として、学習の「めあて」の提示と「まとめ」を確実に行うこと、整理されたノートづくりに取り組むことを確認した。

これらの取組により、小中学校間および2小学校間の学習指導面の格差解消を図った。

②「小中連携推進委員会」を活用した教科指導についての小中連携

小中相互の課題を早期に発見し、その解決に向けた推進地区共通の取組を進めることを目途に支援を行った。互見授業については、5月末から2月中旬までにはほぼ全教員が実施した。本年度は、板書、発問等に焦点を当てて参観するようにした。また、昨年度に引き続き、小中学校間だけでなく小学校間の互見授業にも取り組んだ。互見授業における各教員からの報告内容は、校長会、小中連携推進委員会、各校現職教育等で活用した。

小中連携推進委員会では、各校の学力向上への取組について情報を共有した。授業づくりについては、「和歌山の授業づくり 基礎・基本 3か条」の実践状況、授業の基本方針としての「教えて考えさせる」指導、板書構成、児童生徒に考えを深めさせるための発問の在り方、問いに正対させる習慣を身に付ける指導、補充学習および家庭学習の実施状況等について情報を共有した。

また、推進地区の課題である、活用問題に対応する力を向上させるための方策について協議した。

(3) 放課後学習支援員を活用した補充学習の充実による基礎的・基本的な知識・技能の定着

退職教員等を活用して協力校の補充学習支援を行った。2月末現在でのべ約60人の退職教員の協力を得た。学年の状況に応じて、学校全体での指導および個別的な指導を織り交ぜた取組を行い、基礎的・基本的な学習内容の確実な定着を図るようにした。

協力校で実施した学力定着に効果的な指導体制や学習教材の活用等を、「小中連携推進委員会」や学校訪問等を通じて他校に普及させた。

3. 実践研究の成果の把握・検証

(1) 「学力向上推進プラン」を活用した学力向上に係る検証改善サイクルの取組の支援

平成29年度和歌山県学習到達度調査結果の経年比較（資料2）からは、推進地区内小学校で成果が見られた。平成29年度第4学年では、算数（基礎）で県平均を2.5ポイント上回るなど、成果が見られた。経年変化としては第5学年で算数（活用）が県平均を5.7ポイント上回った。また第5学年は国語（活用）、理科（活用）を除く4項目で県平均を3.2～7.3ポイント上回った。

これは、平成29年度全国学力・学習状況調査の分析結果を踏まえた指導の充実および補充学習の徹底に努めた結果であると考えられる。しかしながら、活用問題については、第5学年算数を除く4項目で県平均を2.4～4.3ポイント下回るなど、未だ成果が十分とはいえない。

中学校では、県学習到達度調査の第2学年理科（基礎）で県平均を2.9ポイント、理科（活用）で8.5ポイント上回る結果となった。教科書に沿った観察・実験等を丁寧に行うように努めたことが要因として考えられる。しかしながら、国語および数学では第1学年および第2学年ともに十分な成果が出ていない。特に活用問題においては、県平均を7.0～11.3ポイント下回るなど大きな課題を残した。日々の授業における指導の充実、学力調査の分析および対策が十分に機能しなかったことが原因として考えられる。

【平成28年度和歌山県学習到達度調査（平均正答率％）】

小学校 第4学年	国語 (基礎)	国語 (活用)	算数 (基礎)	算数 (活用)
美浜町	85.9	31.7	74.0	38.1
和歌山県	74.3	31.2	64.6	35.9
差	11.6	0.5	9.4	2.2

小学校 第5学年	国語 (基礎)	国語 (活用)	算数 (基礎)	算数 (活用)
美浜町	64.9	47.2	70.9	52.0
和歌山県	64.0	47.4	65.6	57.2
差	0.9	-0.2	5.3	-5.2

小学校 第6学年	国語 (基礎)	国語 (活用)	算数 (基礎)	算数 (活用)
美浜町	72.9	43.1	77.7	56.4
和歌山県	75.4	51.2	75.7	57.5
差	-2.5	-8.1	2.0	-1.1

中学校 第1学年	国語 (基礎)	国語 (活用)	数学 (基礎)	数学 (活用)
美浜町	67.2	39.6	64.2	45.5
和歌山県	62.3	46.9	63.9	49.2
差	4.9	-7.3	0.3	-3.7

中学校 第2学年	国語 (基礎)	国語 (活用)	数学 (基礎)	数学 (活用)
美浜町	60.2	28.6	51.8	33.9
和歌山県	64.1	49.7	61.0	46.9
差	-3.9	-21.1	-9.2	-13.0

【平成29年度和歌山県学習到達度調査（平均正答率％）】

小学校 第4学年	国語 (基礎)	国語 (活用)	算数 (基礎)	算数 (活用)
美浜町	63.3	37.0	80.1	47.8
和歌山県	63.9	40.6	77.6	50.2
差	-0.6	-3.6	2.5	-2.4

小学校 第5学年	国語 (基礎)	国語 (活用)	算数 (基礎)	算数 (活用)
美浜町	69.3	33.3	78.9	48.1
和歌山県	66.1	37.6	71.8	42.4
差	3.2	-4.3	7.1	5.7

小学校 第5学年	理科 (基礎)	理科 (活用)
美浜町	71.9	45.4
和歌山県	64.6	49.4
差	7.3	-4.0

中学校 第1学年	国語 (基礎)	国語 (活用)	数学 (基礎)	数学 (活用)
美浜町	49.2	45.8	62.7	56.8
和歌山県	55.0	53.7	69.6	68.1
差	-5.8	-7.9	-6.9	-11.3

学校 第2学年	国語 (基礎)	国語 (活用)	数学 (基礎)	数学 (活用)
美浜町	55.0	52.1	57.6	28.9
和歌山県	50.9	60.9	58.4	35.9
差	4.1	-8.8	-0.8	-7.0

中学校 第2学年	理科 (基礎)	理科 (活用)
美浜町	55.5	46.8
和歌山県	52.6	38.3
差	2.9	8.5

資料2 和歌山県学習到達度調査結果の経年比較

(2) 小中互見授業の推進による授業改善

学習ルールの一貫については、互見授業を繰り返すことにより、昨年度取り組んだチャイム行動の定着に加え、「和歌山の授業づくり 基礎・基本 3か条」を徹底することへの意識が共有された。授業の基本的な展開を意識することにより、1時間完結型の授業が定着してきた。

また、互見授業を行うことで小中連携推進委員会での協議がより具体的なものとなった。従来からの推進地区の課題である、読解力を身に付けさせる方策としての指導の系統表、効果的な発問や指示の在り方、また補充学習の実践例等について協議することができた。

しかしながら、これらの協議内容を推進地区全体で共有し、効果的な実践に結び付けていくということについては十分でない面があった。

(3) 放課後学習支援員を活用した補充学習の充実による基礎的・基本的な知識・技能の定着

退職教員を活用した放課後補充学習の取組により、協力校における生徒の学習態度に落ち着きが見られるようになった。また、補充学習を行う習慣が推進地区内の小学校にも広がることにより、小学校では学力定着に課題を抱える児童に対する指導が充実し、県学習到達度調査等において一定の成果を残すことができた。しかしながら、協力校においては学習の成果が顕在化するまでには至らなかった。

4. 今後の課題

平成29年度全国学力・学習状況調査および平成29年度和歌山県学習到達度調査の結果等を踏まえ、次年度に向けた課題と取組を以下に示す。

(1) 授業改善

推進地区全体としては、全国学力・学習状況調査および県学習到達度調査における児童生徒の学力の定着状況は、十分なものではなかった。小中学校間、小学校間の取組を共有する中で推進地区全体の学力向上をめざしたが、学校間における格差は小さくなかった。

よって、今後は、相互授業参観等、小中連携の取組における授業改善策が推進地区全体に共有され、実践が徹底されるよう努めるとともに、以下の手立てに留意することとする。

- ・「和歌山の授業づくり 基礎・基本 3か条」を徹底すること
- ・整理された板書づくりに取り組むこと
- ・問いに正対して表現する力を身に付けさせること
- ・何を教え、どう考えさせるのかを吟味すること
- ・優れた取組を主体的に参考とすること

(2) 活用問題への対応

学力向上推進プランを活用した検証改善サイクルの取組を支援するとともに、今年度の推進地区の課題である活用問題に対応するためには、基礎的な語彙量を確保する指導、書くことの指導、考える場面の確保等が必要であると考え。よって、以下の手立てを行う。

- ・読む量（読書）、辞書引き量、書く量（視写、聴写、感想文、要約）の確保
- ・条件に従って書かせる指導（字数制限、時間制限、形式制限、内容制限等）の確保
- ・論理的に表現する指導の充実

- ・町独自で作成した「読解力系統表指導事項」の共有

(3) 基礎・基本の定着

補充学習について、授業中、補充学習時、家庭学習時において、以下に示した取組を行う。

- ・和歌山県教育委員会にて作成した「チャレンジ確認シート」「評価問題」「国語マスター問題集」「理科マスター問題集」等を活用し、児童生徒の個別の課題に焦点化した繰り返し学習の充実を図ること
- ・ノート指導の徹底を図ること
- ・家庭学習についての指導の徹底を図ること

(様式3)

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

平成29年度委託事業完了報告書

【協力校】

都道府県名	和歌山県	番号	30
-------	------	----	----

協力校名	美浜町立松洋中学校
------	-----------

○ 協力校として実施した取組内容

1. 当初の課題

平成28年度全国学力・学習状況調査結果の正答率を全国平均と比較すると、国語B以外は概ね全国平均程度といえる（表1）。小学校第6学年で実施した平成25年度の調査結果と比較すると、全ての調査結果が改善している（表1・2）。教科別の課題については下記のとおりである。

【国語】

- ・集めた材料を整理して文章を構成すること
- ・語句の意味を理解し、文脈の中で適切に使うこと
- ・辞書を活用し、漢字が表している意味を正しく捉えること
- ・文章の中心的な部分と付加的な部分を読み分け、要旨を捉えること
- ・課題を決め、それに応じた情報の収集方法を考えること

【数学】

- ・対称移動した図形をかくこと
- ・一次関数のグラフの特徴について、表と関連付けて理解すること
- ・一次関数のグラフから、 x の変域に対応する y の変域を求めること
- ・条件を基に、表から数量の変化や対応の特徴を捉え、 x の値に対応する y の値を求めること
- ・計算の過程を振り返って考え、数当てゲームの新しい手順を完成すること

また、平成28年12月6日に実施した和歌山県学習到達度調査結果では、第1学年及び第2学年については、国語、数学ともに基礎的な学習内容の定着と問題解決力に大きな課題があることが、改めて明らかになった（表3）。

以上のことから、学校としての学力に関する課題として、

- ・基礎的・基本的な内容の習得と定着
- ・国語、数学等の教科内容に関心を持ち、主体的に学ぶ態度の育成
- ・国語力（特に読解力）の育成
- ・学習した内容を基にして考え、理由や根拠を明らかにして表現する力の育成
- ・家庭学習の習慣化と充実
- ・予習、復習と関係付けた授業の工夫

- ・相互に学び合う学習集団の育成
- ・小学校と連携した学習ルールの一貫（チャイム行動や「和歌山の授業づくり 基礎・基本 3か条」の徹底）

が挙げられる。

表 1 平成28年度全国学力・学習状況調査結果（平均正答率％）

中学校第3学年	国語A	国語B	数学A	数学B
本校	76.7	66.0	65.9	44.6
国	75.6	66.5	62.2	44.1
差	1.1	-0.5	3.7	0.5

表 2 平成25年度全国学力・学習状況調査結果（平均正答率％）

小学校第6学年	国語A	国語B	算数A	算数B
美浜町	61.4	44.9	78.2	58.0
国	62.7	49.4	77.2	58.4
差	-1.3	-3.5	1.0	-0.4

表 3 平成28年度和歌山県学習到達度調査結果（平均正答率％）

中学校第1学年	国語（基礎）	国語（活用）	数学（基礎）	数学（活用）
本校	67.2	39.6	64.2	45.5
和歌山県	62.3	46.9	63.9	49.2
差	4.9	-7.3	0.3	-3.7
中学校第2学年	国語（基礎）	国語（活用）	数学（基礎）	数学（活用）
本校	60.2	28.6	51.8	33.9
和歌山県	64.1	49.7	61.0	46.9
差	-3.9	-21.1	-9.2	-13.0

2. 協力校としての取組状況

（1）全国学力・学習状況調査や和歌山県学習到達度調査の結果を踏まえた授業改善や指導の充実

生徒に授業の見通しを持たせ、思考を促し、理解を深めるための構造化された板書について研究した。また、その板書を生徒のノートづくりに生かすことにも取り組んだ。気付き等をメモとして記す習慣を生徒に身につけさせることで、自分の考えをノートにまとめたり、文章を要約して要旨を捉えたりする力の育成を図った。

「和歌山の授業づくり 基礎・基本 3か条」を踏まえた授業づくりと評価を実践するとともに、年6回の校内授業研究会を充実させること、先進校調査研修において情報収集を行うことで、生徒の主体的な学びや思考力、判断力、表現力を高めるための授業改善、教員の指導力向上につなげた。

（2）「hyper-QU」の活用

年間2回、「hyper-QU」を実施することで、生徒一人一人の状況と学級集団の状態、学習意欲の変容を把握し、結果を生かしたきめ細かな指導や支援を行った。

(3) 小中連携による学力向上

①小学校での出前授業による授業改善（数学科，音楽科）

小学校での中学校教員による出前授業を推進した。中学校の教員による教科の専門性を生かした授業を行うことで，それぞれの教科の学習内容の系統性を大切にした授業づくりを意識することにつながった。児童生徒にとっては，学習活動における小学校から中学校への円滑な接続につながった（写真1・写真2）。



写真1 小学校への出前授業の様子



写真2 小学校への出前授業の様子

②小中互見授業の推進による授業改善

推進地区において，小中互見授業を推進した。小中学校それぞれの教員が児童生徒の様子，授業の展開等を見取り，9年間の児童生徒の成長を見通して授業改善，授業づくりを行うことにつながった。

③共通に取り組む内容の選択

学力向上に関わる小中学校共通の課題の中から，チャイム行動や本読みカードなど具体的な内容を選択し，小学校と連携して実践した。

(4) 家庭学習の習慣化と質問教室・補充教室による学習意欲及び基礎学力の向上

協力校で作成した「家庭学習の手引き」を基に，家庭学習の習慣化を図るための指導を徹底した。家庭学習については，各教科の家庭学習の内容と授業との関係を見直し，特に，週末の主体的な家庭学習を推進した。家庭学習に合わせて，日課を大切にされた基本的な生活習慣を身に付けさせる指導も徹底した。

放課後には質問教室を実施し，昼休憩にも，教科担当による小テストや再テストを実施した。また，地域の人材を活用し，計画的な放課後の補充学習を8月から2月末まで各学年で実施した。長期休業中についても，計画的に補充学習を実施した。

3. 取組の成果の把握・検証

(1) 授業改善や指導の充実

「和歌山の授業づくり 基礎・基本 3か条」に基づいた授業実践が徹底してきている。「本時のめあて」の明確な板書は，ほぼ全ての授業で実施しており，「まとめ・ふり返りの時間の確保」についても定着しつつあることが，全国学力・学習状況調査の結果からも分かる（表4）。

「考えを書く時間の確保」についても，概ねできている。

表4 「全国学力・学習状況調査 生徒質問紙調査」について肯定的な回答をした児童生徒の割合

「1, 2年生のときに受けた授業の中で目標(めあて・ねらい)が示されていたと思いますか」			
	H28 (%)	H29 (%)	H29-H28 (pt)
松洋中学校	91.8	98.1	6.3
県	85.9	89.7	3.8
全国	84.9	87.8	2.9
「1, 2年生のときに受けた授業で扱うノートには, 学習の目標(めあて・ねらい)とまとめを書いていたと思いますか」			
	H28 (%)	H29 (%)	H29-H28 (pt)
松洋中学校	73.4	98.0	24.6
県	76.0	82.3	6.3
全国	76.8	80.3	3.5
「1, 2年生のときに受けた授業の最後に学習内容を振り返る活動をよく行っていたと思いますか」			
	H28 (%)	H29 (%)	H29-H28 (pt)
松洋中学校	57.2	78.4	21.2
県	59.1	65.2	6.1
全国	63.1	66.1	3.0

板書の改善が見られた結果, 生徒のノートにも「めあて」や「まとめ・ふり返り」といった項目, 内容が見られるようになった。また, ノートの記述内容からは, 徐々にではあるが生徒が主体的に見通しをもって, 学習できている様子が見て取れるようになってきている(図1・図2)。

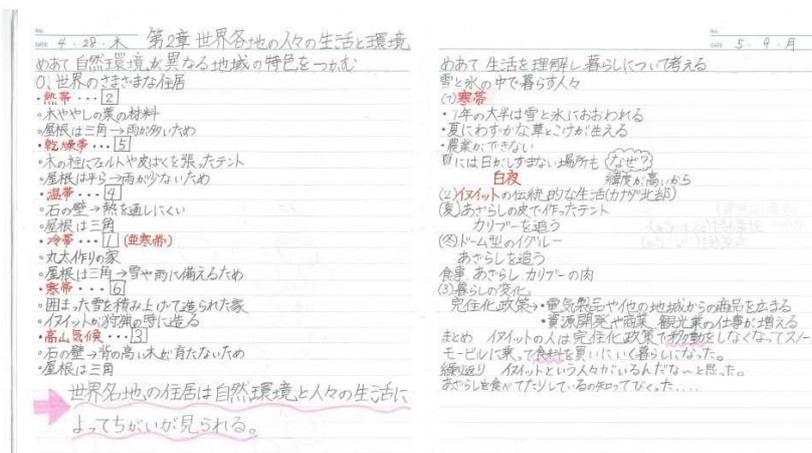


図1 4月の生徒のノート

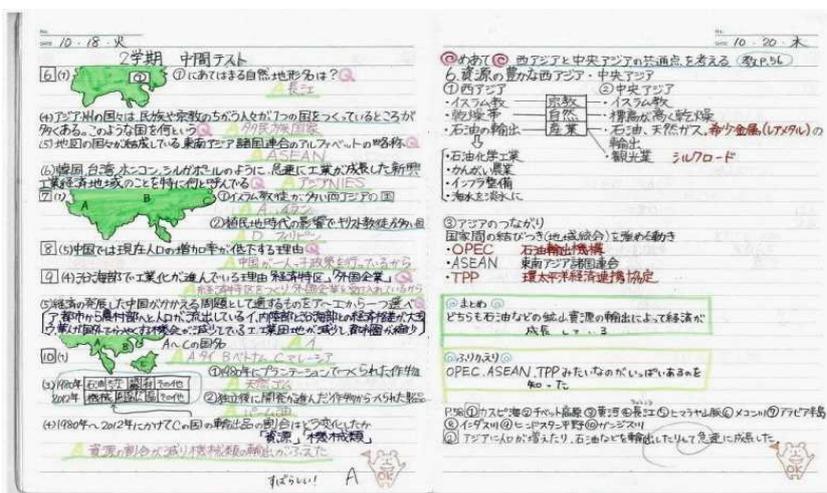


図2 10月の生徒のノート

学校全体で授業改善に取り組む中で、教員それぞれが個人の研究テーマを設定し、そのテーマに沿った授業を実践した。授業後には活発に授業研究会を実施し、回を重ねるごとに、授業構成や、生徒主体の授業の在り方、めあてとまとめの整合性等、教科の別なく、授業づくり全体について改善点を見いだせるようになった。また、次の実践につながる具体的な授業改善の方策が出されるようになった（写真3・4）。



写真3 研究授業後の協議の様子

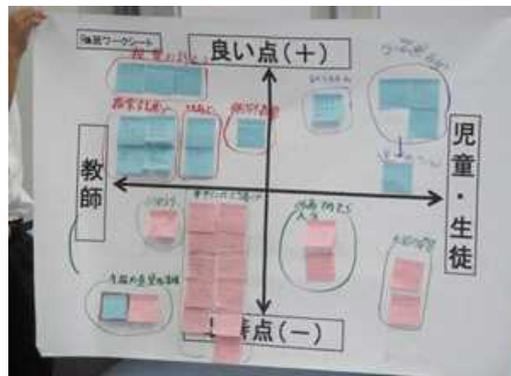


写真4 協議シート

先進校調査研修で学んだ取組については、全教職員による協議を通じて共有し、本校での実態に即した実践へとつなげた。このような取組により、教員の授業改善に対する意識を高めることができた。

(2) 「hyper-QU」の活用による集団づくり

和歌山県教育センター学びの丘が実施している支援事業を活用し、「hyper-QU」の結果について、データの見方等の研修を受けた。その後、各学級担任を中心にして、配慮の必要な生徒について、「hyper-QU」のデータを基に、その生徒が学校生活や日常生活において抱えている課題に対する関わり方を学んだ。また、普段の生徒の行動面と心情面とのずれに対する理解や支援のポイントについて協議した。このような取組を行い、生徒一人一人の状態を把握することで、よりよい学習集団づくりに努め、学校生活満足群に位置する生徒の割合が大きく改善した（図3）。

3年生	平成29年1月実施		平成29年6月実施	
	傷害行為認知群	学級生活満足群	傷害行為認知群	学級生活満足群
	8%	56%	6%	71%
	16%	20%	12%	12%
	学級生活不満足群	非承認群	学級生活不満足群	非承認群

図3 「hyper-QU」の結果の推移

(3) 小中連携による取組

小中連携推進委員会を定期的に開催することで、児童生徒の実態に即し、義務教育の9年間を見通した取組について多くの議論を重ねることができた。今年度は、学習規律の基盤として授業はチャイムで始まりチャイムで終わるなど適切なチャイム行動を徹底していくこと、「和歌山の授業づくり 基礎・基本 3か条」を徹底し、授業展開として、学習の「めあて」の提示と「まとめ」を確実に行うこと、整理されたノートづくりに取り組むこと等を決め、この決まった内容を小中で共有し、日々の指導に取り入れるとともに、互見授業でその効果を見合った。

本校の教員にとっては、互見授業により、小学校での児童の実態に即したきめ細やかな指導を取り入れることに繋がり、各教員が参観後に作成したレポートは、校長会、小中連携推進委員会、各校現職教育等で活用した。これらの取組により、連携する2小学校との学習指導面の格差解消を図った。

(4) 家庭学習の取組

学年単位で、効果的な家庭学習について生徒自身が自主的に考える機会を設定したり、生徒個人の家庭学習の成果が見て分かるよう学校全体で統一した取組を進めたりした結果、家庭学習の実施率が改善した。今後、2年生で行っている「家スタ」という取組を全校で進める予定である。これは学校が独自に作成したノートを全校生徒に配付し、生徒に放課後の生活や学校への持ち物を書かせて、それを担任が確認することで生活習慣を把握したり、日々の家庭学習の課題や時事問題等についての意見を書かせて、自主的な学習を進めたりするノートである。2年間での学年単位での取組を、学校全体の取組として今後推進し、家庭学習の一層の充実を図っていく。

4. 今後の課題

この2年間、様々な取組を実践、研究してきたが、まだ課題は十分に改善されたとはいえない。よって、2年間の研究内容を踏襲し、一層の研究の推進を図る。

まずは、基礎的・基本的な内容の確実な習得と定着である。平成29年度和歌山県学習到達度調査において、1年国語、数学は、共に県平均を5ポイント以上下回り、2年国語と理科は県平均を上回るが、数学で2ポイント以上下回るという結果であった(表5)。よって、国語、数学等の教科内容に関心を持ち、主体的に学ぶ態度の育成について取り組んでいきたい。特に、「和歌山の授業づくり 基礎・基本 3か条」の質を高めるために、生徒が主体的に学ぼうとする意欲を高める「本時のめあて」の内容や提示の仕方や、自分の考えを伝え合ったり、まとめたりする活動等について、授業実践を通して取り組んでいく。

表5 平成29年度和歌山県学習到達度調査結果(平均正答率%)

	1年国語	1年数学	2年国語	2年数学	2年理科
本校	48.5	61.1	54.3	51.8	53.3
和歌山県	54.7	69.2	53.4	53.9	49.0
差	-6.2	-8.1	0.9	-2.1	4.3

美浜町では、小中の発達段階で指導すべき内容を整理した「読解力指導系統表」を作成している。この系統表を活用し、各発達段階で到達すべき内容、読解力の系統等を各教員がしっかりと把握して授業を構成することで、読解力を中心とした国語力の育成を図る。

板書については、この2年間で改善が見られた部分もあるが、教員によって取組に差があるのが現状である。授業内容のふり返りや思考の流れの確認といった板書の機能をしっかりと掴み、良い板書の形を示すことで、学校全体の改善を図っていきたい。

先進校調査研修で学んだ学力向上の取組について、職員間での共有は行われているが、まだ具体的な学校の取組とはなっていない。よって、それらを反映した実践を研究部会を中心に考え、具体的な取組として示していく。